

特集論文「エビデンスに基づく教育改善」

2014 年度全学 FD フォーラム 報告：
「学術文章作法」開講に向けた取り組み

関田 一彦

創価大学 教育・学習支援センター センター長

経 緯

学士課程教育の理念に基づけば、あらゆる科目が、大なり小なりカリキュラム全体の教育目標（＝学生に期待されるラーニング・アウトカムズ、以下 LO と略す）の達成に向けた一コマを担う。スライド 1 に示す共通科目の LO の 4 番目、すなわち「日本語による多様な表現方法を習得し、明確に論じ述べる」ための知識・技能育成を主目的とする科目として、今年度より「学術文章作法 I」が開講された。

スライド 1

共通科目における8つのラーニング・アウトカムズ

1. 人文・社会・自然科学、健康科学領域の基礎知識を理解する。
2. 多面的かつ論理的に思考する。
3. 問題解決に必要な知識・情報を適切な手段を用いて入手し、活用する。
4. 日本語による多様な表現方法を習得し、明確に論じ述べる。
5. 英語と母語以外の他外国語でコミュニケーションを図る。
6. 学びの意味や社会的責務を考え、自らの目標を設定し、自立(律)的に学ぶ。
7. 自他の文化・伝統を理解し、その差異を尊重する。
8. 人類の幸福と平和を考え、自己の判断基準をもつ。

そもそも本学では「書く力」の育成は長い間、重視されてきた（詳しくは本巻掲載の寄稿論文『創価大学のレポート指導科目の必修化に向けた取り組み』を参照）。すでに2003年から「文章表現法」という科目が開講されてきたが、内容もレベルも担当者任せになっていた。そこで、機構設置以来、共通科目の LO 達成に向けて、カリキュラム全体との整合／連動を意識した科目の整備・必修化が検討されてきた。

一方、学生の文章力には幅がある。小学生の作文と見間違えるような者から、プロの作家としてデビューする者まで、本当に多様である。果たして単一レベルのクラスで対応するのは難しいことが予想された。

スライド 2


書く力の重視 ←グランドデザイン

書けない学生の増加 ←携帯文化の浸透?



書く力によるレベル分け

- ・入試形態が様々で、比較できない
- ・英語と違って、標準的な指標がない

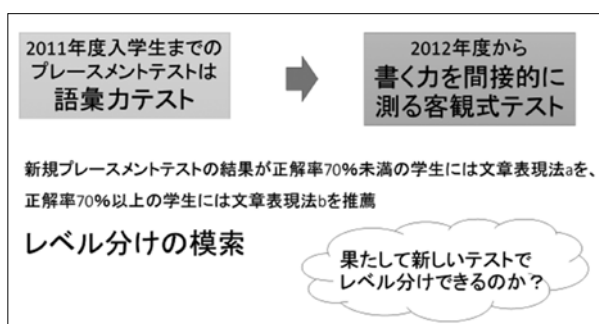

 本学のニーズに合った
レベル分け方法の模索

そこで、英語の能力別クラス編成を範として、2 ないし 3 段階にレベルを分けたクラス編成が検討された。その際、クラス分けの前提となる能力の識別のためにも書く力を測る道具を作らねばなるまい、という話になった。

クラス分けの準備

本学ではすでに、入学時に英・数・国の学力を測るプレースメントテストを実施してきた。これには、様々な入試形態によって選抜された学生の基礎学力を把握し、入学後の学習指導の参考にするという狙いがあった。ただし、英語は TOEFL/TOEIC といった外的指標に合わせたクラス分けが容易であるが、国語に関しては適当な外的指標が存在していない。

スライド 3



従来、国語の基礎学力判定に用いたのは語彙力を中心に測るものであったが、「書く力」を類推するのに有効かどうか疑問視されていた。そこで、2012年度の入学生から、より「書く力」を類推するのに相応しいと思われるテストに変更することにした。

2012年度は試行的に、新しいテストの正答率70%で線引きし、その上下で学生を2群に分けてクラス編成（70%未満の学生を対象にした文章表現法 a、70%以上の学生を対象にした文章表現法 b）を行った（※学生には正答率に応じて a、b どちらかのクラスの履修を勧めたが、強制的な割り振りは行っていない）。ここで、果たして正答率70%での線引きが妥当かどうか、そして新しいテストが学生の「書く力」をどの程度正確に測っているのか、検討する必要があった。そこで、現代用語検定協会が主催する「小論文検定」の採点基準を援用して文章力検証を試みた。

スライド 4

<p>2012年度前期、「文章表現法a」履修者のうち1年生54名</p> <p>文aの要約レポート(800字)のレベルが poor あるいはvery poorとされた学生のテスト正解率は60%以下 fairもしくはgoodとされた学生の正解率は70%以上</p> <p>「文章表現法b」履修者のうち1年生49名</p> <p>文bのレポート(2000字)のレベルが very poorもしくはpoorと判定された学生の正解率は73%以下 正解率75%以上の学生でvery poor/ poorと判定された学生はいない</p> <p>以上の結果から、学生の能力とコース内容の整合性に考慮すると、 正解率60%未満、60%以上75%未満、75%以上という3つのレベルが必要?</p>

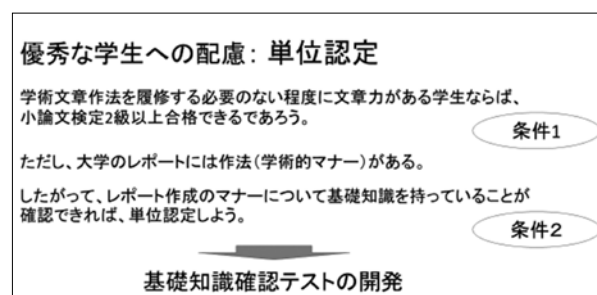
2012年度前期の文章表現法 a 履修者の中で、1年生54名の書いた800字の要約レポートを採点したところ、poor あるいは very poor と判

定された学生のテスト正答率は60%以下であった。また、fair もしくは good と判定された者は全員が正答率70%以上であった。同様に、文章表現法 b 履修者の中で、1年生49名の書いた2000字のレポートを採点したところ、poor あるいは very poor と判定された学生のテスト正答率は73%以下であり、正答率75%以上の学生で poor あるいは very poor と判定された者はいなかった。このように、正答率60%前後、および正答率75%前後で「書く力」のレベルが変わることが推測されたことから、テスト結果により学生を3つのレベル分けることが適当ではないかと考えた。

単位認定の準備

本学に入学してくる学生の学力幅は相当に大きい。わざわざ文章表現の練習をすることを時間の無駄と感じる者も皆無ではないだろう、というのが関係者の共通の認識であった。そこで、必修化に伴って発生する不本意履修（作文練習は不要なのに制度上履修せねばならない事態）に対処するために、単位認定という一種の抜け道を用意することにした。

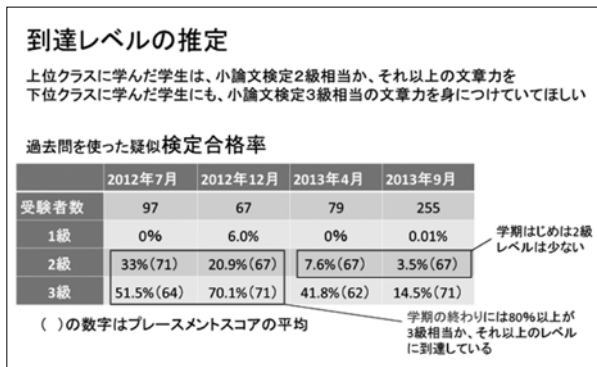
スライド 5



単位認定の条件は2つである。学術文章作法を履修する必要のない程度に文章力がある学生ならば、小論文検定で2級あるいはそれ以上の級に合格できるであろう。それに加えて、レポート作成のマナーについて基礎知識を持っていることが確認できれば、学術文章作法 I の履修を免除し、単位認定（R 評点）することにした。以下、なぜ小論文検定2級を目安としたか、簡単に説明しておく。

2012年度の前期、後期それぞれ終盤（13～14週目）に小論文検定の過去問を使った学習成果の検討を行った。結果は、スライド6にあるように、2級レベルの合格者は、それぞれ全体の33%、20.9%であった。このことから、文章表現法を履修すると、2～3割の学生が2級レベルの文章力を身につけることができることが分かる。一方、2013年度の前期、後期にはその序盤（1～2週目）に同様の小論文課題を実施したところ、それぞれ全体の7.6%、3.5%ほどの学生しか2級レベルに達していないことが分かった。

スライド 6



この2つの調査結果から、小論文検定2級合格の文章力は、文章表現法のクラスで作文練習を積むことで身につく文章力と、おそらく同等、あるいはそれ以上であろうと判断した。念のため、小論文検定の各級がどの程度の文章力なのか、スライド7に示しておく。

スライド 7

小論文検定 特定非営利活動法人 現代用語検定協会	
概要	論理的思考力、批判的思考力、提案説明力。具体的には、文章の一貫性、構成力、説得力、表現力。 制限字数＝1200字
1級	マスコミ・大手企業・上級資格試験に対応できる知識と提案説明力を持ち、自分の考えや意見を読み手が十分に理解できるように伝える文章力があると認定する。
2級	就職試験、資格試験などに対応できる知識と提案説明力があり、自分の考えや意見を読み手が理解できるように伝える文章力があると認定する。
3級	大学生や社会人として身に付けておきたい基本的な知識と提案説明力を持ち、自分の考えや意見を読み手に伝える文章力があると認定する。
4級	対象外

このように、2014年度カリキュラムから新設・必修化された「学術文章作法」のクラス分けに関しては、プレースメントテストのスコアに加え、文章力検定という外的指標を参考に、

そのレベルを設定している。定期的に外的指標を用いることで、この科目の教育効果をモニタすることも可能であろう。今後、仮に新入生の文章力が下降してきた場合、まずその変化はプレースメントテストの結果に表れ、そうした新入生に対する教育プログラムとしての有効性は文章力検定の合格率で部分的にも検証できると考えている。

